

## 研究結果

中国では、明が滅び、清が興った十七世紀なかば、明朝の復興にかける人々が、しきりに徳川幕府に使者を送って、援軍を要請した。いわゆる「乞師」である。その中で最もよく知られ、またその後の日本の思想界に多大な影響を与えたのが、朱舜水である。本研究の課題とした張斐は、この朱舜水と郷里を同じする浙江余姚の人で、朱舜水を追って日本へ渡った人物である。

清の康熙 25 年、26 年（1686、1687）、日本では第五代将軍綱吉の時代、張斐は当時交易を許されていた長崎に来航する。このとき、水戸藩主徳川光圀が儒臣の大串元善を遣わし張斐と会談させたものが『張斐筆語』（写本）として残されている。この中で張斐は自らの故郷に明の崇禎帝の第三子である定王慈炤を匿っていること、そして今回の日本訪問は同郷の朱舜水に倣って援軍を求めることが目的であることを述べる。しかし、この時期の江戸幕府は鎖国政策が厳しさを増していたため、張斐は江戸へ赴くことはできず、失意のうちに帰国する。

長崎に逗留している半年余の間に、張斐は大串元善、今井弘濟、安東守約などの当時の漢学者と面談し、また書簡のやりとりや詩の唱和を通して交流した。その記録と作品が現在に至るまで日本各地の図書館や資料館に残されている。

この間の調査によって、それらを実地に調査し、他にも多くの新資料を発見することができた。それは、『莽蒼園詩稿余』『莽蒼園文稿余』『霞池省庵手簡』『張斐筆語』『東遊稿』などで、さらにこれらに収録されていない詩文や書簡などの原資料（自筆原稿）も発掘し、あわせて各所蔵機関の許可を得てすべてを複写することができた。

そこで、これらの文献や資料の解説と考察を通して、歴史の中に埋没したかのような存在であった張斐の事跡を明らかにするとともに、鎖国時期における日中間の文人たちの密接な交流のすがたを具体的に浮き上がらせることができた。

こうした成果は、その都度、日本と中国のシンポジウムや講演会等で発表し、専門家との間で意見交換をすることで、さらに研究を深めることができた。

そこで、これらの成果をまとめ、現時点では自印の稿本として整理した『莽蒼園稿』に補訂を加え、さらにこれに関連資料や写真図版を付して、2009 年秋には中国の出版社から刊行することとなった。

## 研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- ・ 劉玉才「明の遺民張斐の事跡について—日本に遺された文献に見る—」  
早稲田大学文学学術院中国語学文学・中国古籍文化研究所共同主催  
学術講演会 早稲田大学文学学術院戸山キャンパス39号館第4会議室  
2008年10月4日 15:30-17:00.
- ・ 劉玉才 稲畑耕一郎「明遺民張斐的文献調査与研究」  
中国社会科学院歴史研究所、浙江省余姚市人民政府、茨城県常陸太田市役所主催  
国際シンポジウム「中日舜水学学術研究会」 浙江省余姚市 2008年11月21日

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

- ・ 劉玉才 稲畑耕一郎「明遺民張斐的文献調査与研究」  
『中日舜水学研究会論文集』（中国社会科学院歴史研究所等）所収 2009年7月（予定）

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

- ・ 劉玉才 稲畑耕一郎共編著『莽蒼園稿』、自印、2008年11月
- ・ 劉玉才 稲畑耕一郎共編著『張斐集』（仮題）鳳凰出版社（南京）  
2009年10月（予定）